縁談（賞）

水野仙子

ふと氣付くと、美佐子ははつとして針の手をとめた心持ち顔が赤くなつて居る。

根岸の叔母の此頃續けて見えたのはさまで不思議とも思はなかつたが、二三日前、あの出嫌ひな大森の伯母が墓參のためと出京て來てから、久し振りだからといつて今だに引き留められて居る。根岸の叔父の、肥つた軀も二度ばかり見えた。珍らしいお客樣が來てゐると聞いたからと、昨日は小石川の姉の車が玄關にとまつた。と考へて來ると、今までそれを悟らずに居たのが何となく迂闊らしく、「縁談なんて！」と心にもなく肩をあげて見た。けれどもまた崩るゝやうに足を平にすると、膝に手を重ねて猫脊にして、惘然と腰障子越しに庭の青葉を眺め入つた。

「お仕事？」すらりとそこに入つて來たのは、又の又の從妹に當つて居る仲善の君子。

「感心ね」と笑つて立つて居る。

「あら！」美佐子は實際意外だつたので、暫く其笑顔を眺めて居たが、俄に思ひ當つたらしく、突然

「ホヽヽヽヽ」と笑ひだした。

「厭よ、此人はまあホヽヽヽ」

「どうも御深切樣に……毎度御足勞をかけて相すみません」と首をさげる。

「厭あね美佐さんは……まあなんだつての一體」

悟られたのを悟つたけれども、君子は失笑したいのを押し包んだやうな顔をしてそこに坐つた。

「いえね、唯つていふことを聞くやうな女ですから、白紬一疋は當てにしてないで下さいつてこと」

「まぁ！」溢れるやうな笑顔をぢつと見交して、

「ホヽヽヽヽ」

「ホヽヽヽヽヽ」二人は一緒に高く笑つた。
笑つたあとは暫く視線が外れる、同じく其ことながら二人は別々な考へを辿つた。
今度起つた縁談といふのは、世話好きな根岸の叔母が時々持ち出す話しであつた。けれども其度に父の利衛は、
「むゝあれもなか〳〵見込のある奴だ」とばかり別に嫁らうとも貰ふとも口を切つたことがなかつた。
「一體義兄さんはどうする積りなんでせうね。美佐だつて今年はもう三ぢやありませんか、兄さんや姉さんはよく氣が揉めないよ、ほんに齒痒いやうだ」と叔母は例も陰で姉に喰つてかゝる。
「お前つて人も可笑しな人だよ、誰れが年頃の娘を持つて心配しない人があるものかね、良人だつてそりやあ……だけどもあのむっつり家だからね、自分では何か考へがあるのか知れないが、是はと思つたも一つ二つあつたんだけど、別段それに決めようとするではなし、あゝして裕然構へてるんだから……私も氣が氣でないさ、一の方さへあゝしたことにならなかつたら、そりやあどんなにゆつくりしてたつて構ふまいけれど……何にしても美佐の體は並より大きい方だからあゝして置くのは見ともないさ、いくら無財産だからつたつて、要二郎さんは見込みがあるんだものね、憖か知りもしないところに嫁つて苦勞させるよりは、私は其方に賛成なんだけれど……」母のお豐の話しはいつもかうであつた。
で、叔母も取りとめがなくて、其儘お流れになるのが常であつたが、叔母にも増して常から其ことに躍起となつて居たのは君子であつた。此春、若いから後家で通した親子の二人暮しに、會社員の婿をとつてからは、益々其事に熱心になつて、自分で根岸を訪づれて是非とも纏めて呉れと頼み入つた。頼まれて厭といふ

ことの嫌いな叔父は、早速商用の横濱行きの途中を駈けつけて、相談ではなく、寧ろ命令的にこの縁談を義兄に持ち出した。一日置いての歸途には、もう返事を聞きに寄るといふ位の性急な人、利衛は徐ろに口を開いて、當人同志の心に委せようと言つた。君子は其當人同志の心を受合つた。根岸からは早速大森に手紙が行く。君子は要二郎の乘艦が碇泊地なる佐世保に手紙を書いた。

話しがそこまで進んで居ようとは知るよしもないが、美佐子は今度の縁談のうちに、君子の口の入つて居るのも感付た。

「ねえ美佐さん、あなた私の顔を潰すやうなことはしないでせうね」

午後の日の青葉々々の間にさした庭の方を向いて、尺度で輕く膝を叩いて居た君子は、一寸する時のいつもの癖で、圓い眉をあげて突然美佐子を振り向いた。

二人の間にはもう委しい話しは要らなかつた。美佐子は黙つて其顔を見つめ微笑んで居る。其顔をまた、心を讀むやうに凝乎と見つめて居た君子は、

「自分の心を欺くものぢやなくつてよ」瞬きもせず、力ある聲で言つた。

「ひどいわ！」と直ぐ様口に出たが、美佐子は自分も觸るのを怖れて居た心の或るものを捉まれたやうな氣持ちがして、さすがに笑顔はして見たものゝ、不安と不快とにそれは軈て消えてしまふ。戀ではない、戀ではないと心に急しく繰り返して見た。人を戀ふるといふことが、自分の矜りを傷けるやうな氣持ちのされる美佐子は、君子の今の一言にふと侮辱を感じて、「いゝ飽くまでも反對して見せる！」といふやうな腹になつた。隨分喧嘩もした人の、殊更に藝者の惚氣を聞かされても、「私だつて男だつたら藝者買ひするわ」と言つてすましたこともある位、何事にまれ憎くない人だけ

に、此まゝ言ひなり次第になるのが、如何にも弱點を見透かされるやうな氣持ちがして、ふと胸を襲つた、我が子に遇はれぬと言つたやうな悲哀を冷やかに拂ひ退けようとした。

稍々傾き加減に片足を出して座つた君子の、白地の單の目に立つて袖丈のつまつたのを、行く春の心に眺めて居た美佐子の、思はず胸に浸みた淋しさを破つて

「ね、あのう……」と君子が顏をあげた。そこへ恰度、廻らぬ子供の口眞似しながら、美代子を抱いた小石川の姉が廊下を傳はつて來た。

「君さんも美佐さんも茶の間に被來いつて、お茶が出ました」

「有難う。美いちやん小母ちやんに抱つこなさいな、ね、さあ被來い！」と君子が手を出すと、美代子はにつと笑つて母の胸に顏を押しあてゝしまふ。

「あら〳〵、美いちやんは小母ちやんを嫌つちやつたの？　厭だわねえ」と立ちあがつて、

「今日はお歸んなさるんですつて？」

「えゝ、宿る積りでないのを宿つちやつたんだもの、今ね人力車をそいつてやつたところよ」

「さあ美佐さんもお出でな」

同じ位な脊を並べて二人は先に出て行く、小聲に何か話しをはじめた。

娘二人のどちらでもといふ心組みで、學費の萬端を世話して居た母方の甥の一が、血族故と姉の申込を斷つてから間もなくの妻帶、父母の失望、嫂の怨恨、今のところに嫁ぐ前の姉が苦悶や、去年の暮、一の弟にと自分を望んで來たのを見事に刎ねつけたことや、自分を慕ふその人の眞面目な顏などを樣々と思ひ泛べて、美佐子も續いて茶の間に行つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

夫が何事も自分をさし置いて、嫁の世話をし世話を

されるのを、長らく不平に思つて居た伯母は、とめられるに委せて一月あまりも滯在した。「彼奴がどうかなつたら、私は要二郎の世話になる積りです」とはよくいふ言葉である。遠慮深い性質にも似ず、此頃は自分で出來ることまでわざ〳〵美佐子の手を煩らはして、時には姑らしい物言ひをする時もあつた。却てそれを喜ぶ容子が美佐子にも見えて來た。お豐はそれに目を欹てた。我が子の愛のかくて一日〳〵に移し植ゑらるゝのを見た時、いふべからざる淋しさと妬しさとの思ひに滿たされたのであつた。

「なんだかあまり思はしくない縁談ぢゃないかね、あまり長引くんだもの、私はなんだか心配になつて來ましたよ、寧そ……いつそ破談にしたらどうだらうか、あのお兼さんて隨分口が八釜しさうぞよ、今までは一緒に居たことがなかつたからさうとも思はないで居たけれども……ね、氣をつけて御覽よ、今から姑づらをしをつてさ、自分が育てた娘ぢゃあるまいし……」

或日お豐は根岸の妹を訪ねてこんな言を云つて歸つた。

初め總領の要一の嫁にと姉の方を望んで來た時、當人が進まなかつた爲で體よく斷つたのを、今更妹を貰つて呉れとは……といふ腹があるので、大森の方からはまだ捗々しい返事がない、近々に出向いて是非とも纏めて見せると根岸の叔父は力んで居る。

美佐子は心にもなく今だに反對をして居る。

入力者注：底本は総ルビですが、入力者の判断で一部のみ残しました。

底本：「文章世界」明治四十一年九月號
テキスト入力：小林　徹
公開：令和四年二月二十七日
リンク：水野仙子作品年譜